

武蔵野日曜聖書講筵

求与

——マタイ伝第7章7～11節——

1993年6月13日

小池辰雄

リアクション 空っぽになって求める キリストに直結 ホワイトホール キリストを食べる
求与

【マタイ7】

7 求めよ、然らば与えられん。尋ねよ、さらば見出さん。門を叩け、さらば開かれん。8 すべて求むる者は得、たずぬる者は見だし、門をたたく者は開かるるなり。9 汝等のうち、誰かその子パンを求めんに石を与え、¹⁰ 魚を求めんに蛇を与えんや。¹¹ 然らば、汝ら悪しき者ながら、善き賜物^{たまもの}をその子らに与うるを知る。まして天にいます汝らの父は、求むる者に善き物^{たま}を賜わざらんや。

●リアクション

今日は「求めよ、与えよ」（求与）という題です。人間の側からの「求め」よりも、神・キリストの側から「与え」ようとしている。これが大前提です。与えようとしていること、それにかかって求めていく「リアクション（反射）」なんです。リアクション的な求めが本当の求めなので、それでない求めはくたびれてしまう。

「我を否む者は、我も汝を否む」

とキリストが言われたが、やはりもう今ははっきりと言った方がいい。

人間が一人ひとりたまわっているところの天来の、生来の資質才能がある。その生来の資質才能にその人の使命がある。その使命感というものを、高等学校の生徒になったら、持たせない。暮らしのためではない。生きること、その人が社会、国家、世界に対していかなる使命を持っているか、その人の生来与えられた才能資質に使命がある。それを鍛えあげて世のため人のために尽くす。そういう使命感を持つこと。今の普通の教育ではやっていないから。なにしろ、普通の校長もダメなんだ。中学生はちよつとまだ無理ですけども、高校生あたりからはその自覚を持たなければいかん。我々、福音を受けとっている者には大きな使命がある。

7 求めよ、然らば与えられん。尋ねよ、さらば見出さん。門を叩け、さら



ば開かれん。⁸すべて求むる者は得、たずぬる者は見いだし、門をたたく者は開かるるなり。

キリストは無条件的な言い方をなさる。何を求めるのか分からない。我々が本当に求める時は、今持っているものを捨てなければダメなんです。やはり、無の境地に入らないと、本当に求めることはできない。この「求めよ」は、

「我（キリスト）を求めよ」

ということ。神・キリストを求める。

「そうしたら、私をお前にあげるよ」

ということです。

「尋ねなさい。必ず見い出す。ここに居るではないか」

ということ。

「門をたたけ」

十字架という門です。十字架という門を叩くと、開かれる。その先は聖霊の世界になる。イエスは、

「こういう場合には、こういうものを求めよ」

というような条件的な言い方はしない。非常に余白が、余韻が多い。だから、求めるものは中心的なものです。

「我を求めよ、神を求めよ」

ということです。

●空っぽになって求める

本当にそれを求める時には、自分が無にならなければ求められない。何か自分が持っている求めたって、そんなのはダメなんです。捨ててかからないと。

「捨て身」

という言葉がある。身を捨ててかかる。空っぽになって求める。だから、いつも本当の——立場でなくて——平伏しの場合は無なんです。そうしたらば、無条件にキリストを求める。無条件なるものはキリストの他にないから。あとはみな条件がついている。キリストという実在は無条件的な存在です。だから、無条件なものを受けとるためには、自分が本当に無になって平伏して——無の姿は平伏ですから——一切を捨ててかれ、ということ。有れども無きに等し、という。得たと思ったら、そこはもう自分が居ない。自分が居ないというのは、キリストの中に入ってしまっているから、見えない。

「求めよ、さらば与えられん。」

私をお前にやるから、一つになっちゃおうぞ
ということ。



「私を尋ねなさい。必ず見い出す。

ここにいるではないか、一番近いところに」

と。「道は近きにあり」という。

私の過去の歴史から言いますと、兄貴がキリスト者として仆れました。彼の持っている本、内村先生の『宗教と現世』を開いて、私は直ちに感激した。何とか、求めたわけだ。そしたら、見い出した。そして、内村鑑三の集会の門をたたいた。そして正に、開かれた。この通りです。それから後で、藤井武先生の家庭集会に、大学一年の最初の日曜から行きだした。先生が仆れるまで五年間。私の個人的な歴史はそのようなことで、藤井武先生の門をたたいた。

9 汝等のうち、誰かその子パンを求めんに石を与え、
10 魚を求めんに蛇を与え
んや。11 然らば、汝ら悪しき者ながら、善き賜物^{たまもの}をその子らに与うるを知る。

まして天にいます汝らの父は、求むる者に善き物^{たま}を賜わざらんや。

「善き物」とは聖霊です。これはルカ伝11章13節には「聖霊」と書いてある。

求めるときには、他のものは捨ててかかる。空っぽでいく。空っぽでなければ、本当にそれが得られない。これが本当の「求め」です。そうすると、全的に入ってくる、こつちが空っぽだから。イエス自身が神さまを求めて、空っぽで求めたから、神が彼の中に入ってしまった。だから、

「我を見し者は、父を見しなり」

と言われた。我々は、

「我を見し者は、キリストを見しなり」

と言わなくては。

●キリストに直結

「信仰」ではない。現実なんだ。キリストという実在を、実存を受けとる。だから、「信仰、信仰」なんていう言葉は止めた方がいい。まだるっこい。現の世界^{うつ}です。信仰なんて言うのと、二段構えになってしまう。私たちはキリストに直結ですから。

「あなたはプロテスタントですか、カトリックですか？」

と聞かれたら、

「私はプロテスタントでもカトリックでもありません。使徒たちと同じようにキリストに直結です」

と私ははつきり言う。普通の人**は**びつくりするんだな、そんなことを言うのと。それが本当の現実ですから。信仰ではない。現^{うつ}だ。

「キリスト、わがうちに。我れキリストの中に」

という絶対恩寵の現実です。

「こつちが大分聖書を勉強したから、だから、キリストが入ってきた」



なんてことではない。キリストを限定したら、閉じ込めたらダメです。無限定のひとだから。私は今、詩を書いている。けれども、この詩は終りのない詩です。私は「終り」というのは嫌いです。終りなき世界、限りなき世界を求めている。私はそこらのクリスチャンとは違うんだ。

「凡人」^{ただひと}（使徒行伝4・13）

だ。キリスト者なんて言わなくてたくさんだ。ペテロではないが、凡人なんだ。

ペテロがペンテコステで聖霊を受けてから、そのような境地になった。ペテロにはキリストが満ちているものだから、「立て！」と言ったら、生まれつきの跛者^{あしなえ}が立つてしまったでしょ（使徒行伝3・1～10）。大変なことです。

昨日も会合で身体の悪い人が二、三人いたから、私は会合の後で手を置いて祈った。

「はいつ、治ったぞ。ポリープなんか消えてしまったぞ」

と。私が祈る時には、空っぽになって祈りますから。こつちが空っぽにならなければ本当の祈りの世界にならない。

「先生、何か身体がすっかり熱くなりました」

なんて言ってびっくりしていた。

「どこが悪いここが悪いではない。神さまの生命は全生命的なんだから、ここが悪いからここを治してくれなんていう、局部的なことではない。全生命的なものを受けとれば、局部的なものは自然に消えてしまうぞ」

ということですよ。

● ホワイトホール

だから、

「無条件に求めよ、与えられるぞ。私を与えるぞ。」

私を尋ねてごらん。必ず見い出すぞ」

と。そういうキリストに吸い込まれていく。

ブラックホールという吸い込む星がある。キリストは霊界のホワイトホールだ。キリストに吸い込まれてしまう。「与えられる」どころではない。

「こつちがキリストの中に吸い込まれました」

ということ。これが本当の世界です。

キリストが自分の中にやってきたら、今度は、このキリストを人に与えざるを得なくなる。これが伝道です。だから、あなた方一人びとりは伝道者なんです。キリストを分かたざるを得ない。もう、世は末だから、21世紀にむかって、遠慮なくはつきりと言いなさいよ。み霊における権威の言葉は相手の心をうつ。相手が宗教の世界を知ろうが知らなからうが、そんなことは構わない。そうすると、聞いてくる。だんだん、その中に自然に引き入れる



ようになる。女の方も遠慮は要らん。ただ、その一切のことは愛が土台です。愛がその性格です。「愛する」というようなことを概念的に言う必要はない。与えてやまざることが、助けてやまざることが愛するということです。具体的なものです。

「神の中に、キリストの中に生き動きまた在る」(使徒行伝17・28)

そういう者は人を、生き動きまた在らしめる。こちらが生き動きまた在ると、人を生き動きまた在らしめる。そういう働きをなしてくる。

「なにか知らんが、あの人は頼もしい人だなあ」

と、その頼もしきがおのずから感ぜられるような実存である。私は「行為^{おこない}」という言葉よりも「実存」という言葉が好きだ。行為というと、なにか二段構え的な言葉になる。この実存はいわゆる実存哲学ではない。もつと宗教的な実存です。霊的実存、聖霊にある実存です。「存在」という言葉がある。「在」は静的で「存」は動的なんです。

「⁵汝らキリスト・イエスの心を心とせよ。⁶即ち彼は神の貌^{かたち}にて居給いしが、神と等しくある事を固く保たんとせず、⁷反つて己を空^{むな}しうし僕の貌をとりて人の如くなれり。⁸既に人の状^{さま}にて現れ、己を卑^{ひく}うして死に至るまで、十字架の死に至るまで順^{したが}い給えり。」(ピリピ2:5～8)

とある。キリストは

「己を空しう」

していたひとなんです。空無の世界です。空無だと、神が満ちてくるから充滿してくる。神の生命が溢れるためには、自分が空しくなっていなければダメなんです。キリストの生命が溢れるためには、我が我無き世界に入らなければ。

「自分の信仰は何とかかんとか」

なんて、そんなことを考えているうちはダメです。何といったって、この無の世界です。だから、即無限無量なんです。無即無限無量というのはそういうこと。その無限無量の内容はキリスト、聖霊なんです。だから、その力でもっていろいろなことをやるから、疲れない。やっていることが楽しい。我慢してやっているのは、くたびれる。原動力が、キリストのみ霊の智慧と力が来ているから、何でも楽しくできる。学生なら、勉強が楽しい。勉強を勉強なんて思わない、遊んでいる。どんどん入ってくる。本を読んでも、この光で読んでいると違う。こちらが無になつていっていると、その働きがいろいろな姿で働いてきます。自分がなにかガッチリ構えていたら、疲れてしまう。

●キリストを食べる

祈るときに、時には断食する。断食というのは、我慢するための断食ではない。普通の食物を断つということはキリストを食べるということになる。キリストを食べるために普通の食物を断つ。



「我を食らえ、我を飲め」(ヨハネ6・48～58)

とキリストは言っているでしょ。祈りの世界でキリストを食べる。キリストは荒野で四十日四十夜、断食された。神さまを食べていたのだろうね。サタンや獣がみな逃げて行ってしまった。お釈迦さんもやった。いろいろな誘惑がくる。それを退ける。我慢していたら、誘惑には負けますよ。本当に光の世界を、生命の世界を、愛の世界をグーッと受けとっていれば、誘惑よりも素晴らしい内容だから、誘惑しようとする方が、サタンの方が逃げていく。病気の方が逃げていく。

「病気」とは面白い言葉だ。病める気、間違った気なんだ。

「天地正大の気」

とは反対だ。何だって気の世界だから、霊的な、悪い気と善き気がある。大気、霊気という。海辺や山の中へ行くと、空気の味がいいね。都会はダメなんだ。都会の人は時々、山や海辺に行かなくてはいいかん。

自由無礙の境地で凄かったのは老子です。孔子ではない。孔子は老子と比べたら、次元が違う。

「道の道とすべきは常の道に非ず」

という。無道の道だ。道無き道です。

「これが道でいふる」

と決めたらダメなんです。無道が本当なんです。

無道の道を現実に行っているのが鳥です。鳥は風に自由に乗って、鳥の飛び方というものは実に微妙なものだ。私は人間でなければ鳥になりたい。いいねえ、鳥は。動物の中で鳥が一番うらやましい。鳥は無道の道を飛んでいる。足跡もない。これは自由無礙の世界だ。老子は鳥と同じだ。老子というのはそういう人間です。でっかい。

キリストを、「キリスト教」なんて言って、やれ

「カトリックだ、プロテスタントだ」

とさんざん、信仰箇条なんかを作って、キリストを限定してしまつて、駕籠^{かご}の鳥にしてしまっている。冗談じゃない。

「黙って聖書を読め、聖書の現実の中に入って行け、無限無量の世界に入って行け」

とそれだけの話です。註解書なんかいらぬ。註解だらけだ。ご苦労さんな話だ。「聖書研究会」なんかで聖書の世界に入れるか、というんだ。とにかく、聖書は大変な本ですから、これが楽しくならなければウソです。

●求与

そういうのが本当の求めです。

「空っぽでなければ本当の求めにならない」



と申し上げてます。何か持っていて求めたつてダメです、捨ててかからないと。無条件に求めるものはキリストの他にない。だから、キリストは何も言わない。

「求めよ、さらば与えられん」

と。これは不思議な言葉だよ。

「求めるものに、善きものを賜わざらんや」

「善きもの」は聖霊なんです。

「私を本当に求めてみる、聖霊をやるぞ」

ということですよ。暗号みたいな言葉だ。聖書は暗号の本です。「与えられん」どころではない。吸い込まれてしまう。ホワイトホールだから。

「あなたを求めていたら、吸い込まれました」

と、これが本当の答えだ。いつまでも「信仰、信仰」なんてよしなさいよ。くたびれてしまふから。

だから、今度は、本当に人に与える。

「求与」

なんていう熟語はないけれども、本当に求めれば、そして得れば、人に与えざるを得ない。己自身を与えていく。わがうちなるキリストを与えていく。ざるを得ない。流れていく。天の水は降つてくると、横へ流れていく。降臨なんだ。キリストが降臨すると、我々を通してキリストの愛が横に流れていく。

素晴らしいね、塩水というのは。海を見ていて、塩辛いとは思わない。いろいろなものが流れ込んでくる。海は何でもみなこれを浄化してしまう。全部、浄化作用を起こす。そこから、水蒸気が上がる。水蒸気が雲となり山へ行つて、きれいな水になって降ってくる。大海があるから雨がある。大海がなければ雲がないし、雨がでない。大変なものだ、この大海というものは。大海には光が射すから、水蒸気が上がる。水蒸気はひとつも塩辛くない。大自然というものは凄いものだ。これが循環しているのだから。こうやって浄化作用を起こしてしまう。

身体の調子が悪くても、薬を飲んだらダメです。草根木皮がいい。東洋の自然の草根木皮を飲みなさい。化学的な薬はダメです。やはり自然から来ているものはみな本当です。我々は自然界の一つである。鉱物も動物も植物も人間もみな自然界に属する。

そういうことのちゃんと見えていた人はやはりゲートルだ。ゲートルは非常に自然に融けた人です。大自然においてそこに「ゴットハイト」(神性)を見ている。自然界において神性を感じていたのはゲートルなんです。日本の文学者や文人はゲートルには次元がかなわない。ダンテよりもゲートルの方がひろい。ドストエフスキーの文学は暗い。ゲートルは明るい。ドストエフスキーは別な深さをもっているから、別な意味で素晴らしいけれども。

ま、そんなわけで、楽しくやりましょう。聖書の世界は喜びの音信おとずれなんだから。

